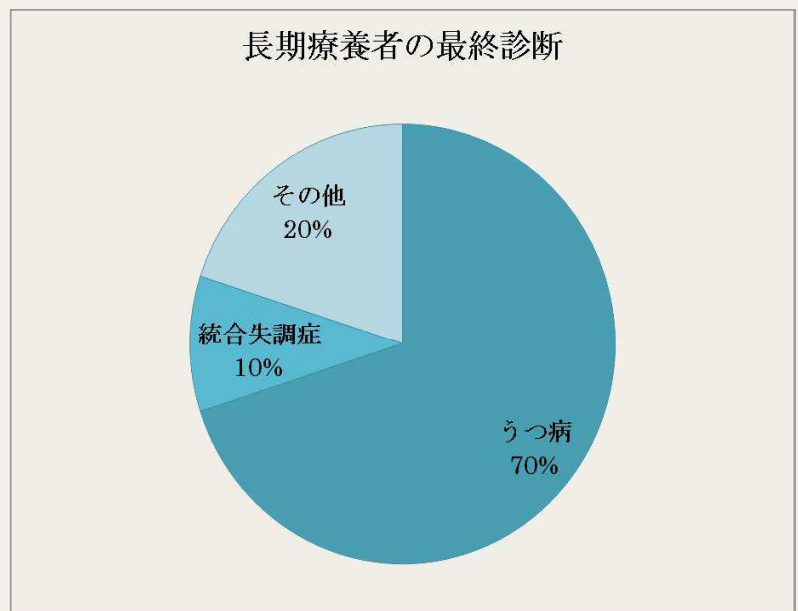


「うつ病」は発症前に予測できるのか？

「うつ病」発症直前のサイン

「うつ病」は、抑うつ状態を呈する代表的な内因性疾患である。MD.net のクライアント企業のメンタルヘルス不調による長期療養社員の内訳は、大うつ病 major depression が約 70%、統合失調症 schizophrenia が約 10%、その他が 20%と、主治医の診断書病名とは異なり、圧倒的に「うつ病」が多い。企業によりその業種も異なり、同じ企業でも業務内容や年齢構成も異なるため、一定の傾向を認めることはできないが、ある時点の、IT 企業では、長期療養社員の 90%をうつ病が占めていたこともあった。

一般に、正規雇用にある社員の全長期療養者のうち、メンタルヘルス不調によるものは半数を超えと考えられているが、確定診断に至るまでの道のりは長い。例えば「うつ病」では、すでに発症しながらも、「うつ病」という確定診断が下されるまでの期間は平均 2 年間である。これは、「うつ病」であっても、何らかの心身の不調を抱えながら、平均して 2 年間は他の診断で治療を受けているか、放置されていることを意味している。これは世界共通の傾向でもあり、かなり前に WHO でも取り上げられていた。



平均 2 年間である。これは、「うつ病」であっても、何らかの心身の不調を抱えながら、平均して 2 年間は他の診断で治療を受けているか、放置されていることを意味している。これは世界共通の傾向でもあり、かなり前に WHO でも取り上げられていた。

「うつ病」に先行する身体症状

「うつ病」では、その発症前に何らかの身体症状が先行して出現することが多い。原因のはっきりしない「疼痛(いたみ)」と「消化器症状」はその代表的な症状群である。これまでこれは、気分が落ち込んでいるから、あるいは疲労が溜まっているから、体調が悪いと考えられてきたが、最近の研究では、脳機能の乱れ初めの身体的な表現であるというのが通説となっている。

最近、それを裏付けるような興味あるデータを見つけたので、参考にしてもらいたい。これは、日本の診療報酬請求書(通称レセプト)の分析結果である。レセプト病名は、往々にして真の病名と異なり、投薬や検査などのために便宜的に付けられることもあるが、その結果は私にとってはかなり生々しいものであった。

この調査では、まず、うつ病が確定するまでの期間、徐々に増加してくる疾患、あるいは状態を分析している。期間は、2008年7月～2009年6月の1年間で、対象は、全て初発の「うつ病」と後で確定された20歳から59歳までの患者2500人である。ここでは、それらの各患者の「うつ病」発症直前の2年間で半年単位に分割し、疾患の出現率(当該疾患出現数/母数患者数)を調査している。

A) うつ病の2年前から徐々に増加している疾患

B) 直前の半年(グラフでは前6カ月を表示)で、出現率が3%を超える疾患



この調査の考察のなかで、著者は、年齢により自然に増加する疾患も含まれるとしながらも、「うつ病」の発症直前に急激に増えている疾患や状態は、年齢補正を行なった結果、加齢との相関はなかったとしている。出現率の高い疾患との因果関係や背景情報の詳細は不明とはいえ、参考になる結果である(図1)。

まず、上記の条件に該当した疾患の中で、「うつ病」の診断名がつく直前の6カ月間に出現率が高かった疾患の1～20位までをランキングは以下のグラフのようであった。

高かった疾患の1～20位までをランキングは以下のグラフのようであった。

また、直前の半年間における出現率の上位20疾患には、精神・神経系の疾患から生活習慣病、消化器疾患までさまざまなものがあつたが、トップは不眠症。胃炎などの消化器疾患も複数ランクインしている。また、「うつ病」の確定診断前2年間の出現率の増減カーブは疾患により異なるが、精神・神経系の疾患は、診断確定の直前で急増する傾向があつた。

社員の勤怠が乱れ、その時にこのような疾患や状態像の診断書を出してきたら、それは「うつ病」かもしれない。それは特に驚くべきことではない。「うつ病」は common disease なのである。

図1 うつ病確定診断前に出現しやすい疾患
(調査期間:診断直前6カ月間)

